

Moby-Dick 解釈の問題点

前 田 禮 子

Moby-Dick のいわば、authorized version として Northwestern Newberry Edition が、1988年に出版された。たしかに、今日まで、*Moby-Dick* について批評され評価され語られてきたことのすべてが網羅されており、その点では、じつに大部の、優れた Edition であるのはいうまでもない。しかしまた同時に、この版には数多くの疑問点が含まれている。この *Moby-Dick* は、Harrison Hayford 博士主幹による、*The Writings of Herman Melville* の Vol. 6 に収められており、Northwestern Univ. Press と The Newberry Library (Evanston and Chicago) から、共同出版されたものである。この版では、数多くの訂正が加えられている。Hayford 博士は、すでに Norton 版の *Moby-Dick* をその編者になって出版しておられる。Norton 版では、今回の Northwestern Newberry 版の原型ともいべきものが、すでにできあがっていて、*Moby-Dick* 批評の概観、原文の訂正、問題点の指摘などがおこなわれている。Northwestern Newberry 版は、索引などの面倒な作業を徹底して整備し、Norton 版を集大成したものであるとあってよいだろう。

ところで、Northwestern Newberry 版（以下 NN と略す）の大きな特色は、原文の訂正にある。Melville 自身の、原本の手書き原稿は残っていない。それをもとのかたちに戻し、*Moby-Dick* 批評の集大成をする、というのが、Hayford 博士の目的であるとおもわれる。初版は、イギリスとアメリカで、ほんの数ヶ月の間隔をおいて、ほとんど同時に出版されている。しかしイギリスで出版された初版は、おそらくは出版社の手によってといわれているが、すでに相当な訂正が加えられていた。数ヶ月遅れでアメリカで出版されたものは、タイプミスやまちがった綴字などが多く、訂正のあとが少いので、これが、Melville の原本に近いだろうと考えられている。初版が出版された当初から、こういった事情があったため、現在までも、原文の訂正などといった、おもいきった作業が、あまり大きな疑義をはさまれずに起りうる下地は十分にあった。(NN 版は、すでに第三者によって訂正を受けたイギリスの初版 (E 版) を、ほとんどそのまま踏襲しているが、NN 版独自の大きな修正も少なくない。訂正の多くは、句読点や引用符、ある

いは綴字に対してである。そういった技術的な訂正もふくめて、はたしてNN版の大幅な訂正が妥当であるといえるであろうか。登場人物の名前も、前後関係から矛盾すると判断して、別の人物の名前に取り替えてしまったり、別の単語に置きかえてしまったり、引用文を典拠どおりに書き直してしまったり、それほどまで大胆に原文を変えてしまってよいのかどうか。Melvilleの原文の意図から遠く離れてしまっているのではないか、といったばくぜんとした疑問を感じる人もあるのではないだろうか。完全に正確な*Moby-Dick*を作り出したい、と願う編集者の気持は十分に理解できる。*Moby-Dick*は、あまりにも、表面上はつじつまの合わない支離滅裂な作品にみえるからだ。たしかに、NN版の編集者は、*Moby-Dick*をすみずみまでよく吟味して矛盾する箇所を洗い出している、ほとんどの批評家がおおぎっぱに*Moby-Dick*の全体像をとらえようとしているのにたいして、NN版が、テキスト中心という事実を以て、*Moby-Dick*をみつめている点では、新しい方法を打ち出しているということによく理解できる。しかし、テキスト中心という観点から出発しておりながら、正確なテキストを再現しようとして、Ur-textともいべきMelvilleが意図した原本の*Moby-Dick*とはかけ離れた*Moby-Dick*がAuthorized Versionとして流布することになる、という矛盾におちいってしまう、ということにNN版はなるのではないだろうか。

NN版の特色は、第一に、以上概括したような、過剰にして不必要な訂正がおこなわれている、という点にある。つづいて、NN版は、解釈上のさまざまな疑問を提示している。つまり、解釈しようにもチンプンカンプンで解釈の仕様がなとおもわれる箇所を指摘し列挙しているのである。全体としての作品*Moby-Dick*は、優れた偉大な哲学の書ではあるが、細部の記述にいたっては、支離滅裂である、とNN版は指摘している。こういった細部についての問題提起、これもNN版の特色のひとつと言えるだろう。また、NN版の特色は、*Moby-Dick*には、不必要な重複(Unnecessary Duplicates)が充ち溢れている、と指摘している点である。重複についての指摘は、これまでもあったことであり、NN版独自のものとはいえない。しかし、要するに、テキストの訂正、矛盾箇所の指摘、不必要な重複についての問題提起、こういった点がNN版の特色である。

ところで、MelvilleによるUn-textが存在しないのだから、NN版の主張は、NN版の価値基準にもとづいて判断したときに当てはまる説であって、別の視点から眺めたときには、まったく違ったものになる可能性がある。NN版が*Moby-Dick*の欠点を洗い出したことは、NN版の功績であると同時に、NN版の批評基準の欠陥を露呈したことになるかもしれないのである。NN版が認めているように、疑問点が続出することは、当てはめた尺度が合っていないという証拠になるかもしれないのである。

Melville自身が*Moby-Dick*をimperfect bodyであるとしたための手紙をHawthorneに宛てている、という事実があって、それをNN版は一つの証拠事実として挙げ

ているが、作者の手紙を批評家そのまま認めて、先入観念をもって *Moby-Dick* を判断するのは、いささか短絡の感がある。Melville は、もっと違ったことを考えていて、作品 *Moby-Dick* を imperfect body であるといったかもしれないのである。これについては、後述する。

Moby-Dick を解釈するにあたって、支離滅裂な構成であると断定してしまうのではなく、*Moby-Dick* の技法には秩序があると解釈する方法がないわけではない。

第79章に「大草原」'Praire' という章があって、その章題の Praire という語の綴りはまちがって綴られている。しかし、この単語の綴りを正しい綴りになるように、i という文字を付け加えて、Prairie、と訂正してしまうのは妥当だろうか。たしかに、正しく綴るのが目的であれば、訂正するのが妥当であろう。しかし、'Praire' の章を読んでもれば、Melville が意識的に Prairie の綴りから、i の文字を欠落させたかもしれないということが感じ取れる。

その 'The Praire' の章では、人間の顔や動物の顔が風景にたとえて見られている。人間の顔に、もし鼻がなければ、風景にたとえると、そこにそびえたつ引きたてるもの、たとえば、教会の高い尖塔のようなものがなければならぬと感じられるのと同じで、その風景には、なにか欠落したものが感じられる、と書かれている。この章では、抹香鯨の顔の、正面から見たときの、のっぺらぼうの顔が、大草原の景色にたとえられているのだが、人が大草原を見たときに、なにかが欠落していると感じるその印象を、Prairie という単語の中から i の一文字を欠落させることによって、あらわしているのではないだろうか。つぎの文から、それをうかがい知ることができる。

Dash the nose from Phidias's marble Jove, and what a sorry remainder!
Nevertheless, Liviatan is of so mighty a magnitude, all his proportions are so stately, that the same deficiency which in the sculptured Jove were hideous, in him is no blemish at all. Nay, it is an added grandeur. A nose to the whale would have been impertinent. (p. 446)

Phidias の作った大理石のジュピ一像の鼻を打ち砕いて取り除いてみよ、そんなことをすればその顔は見られたものじゃない、と書かれている。ところで、この文の Dash ~from は、打ち砕く、一撃して取り除く、といった意味になるが、同時にまた、dash ~from には、dash off ある一語から一文字を取りのぞく、という意味も含まれている。つまり、i という小文字は、象形文字として見たばあい、そういうことが可能であるかどうかの論議はさておいて、i という文字は、人や動物の顔の鼻のかたちをあらわしていることになる。この引用文の中の Phidias と Leviathan という語の中には、いずれも、真中に i という文字が含まれており、こういった言葉づかいの中に、文字の i と鼻とが等価であるということが、implication として示されているのではないだろうか。

鯨のばあいは、鼻がないということが、かえって崇高さをあらわすことになる、と書かれている。人間とは違って、神には顔がない。そのかたちがない、なにもない、空白である、というところが、神の絶対者たる資質をあらわしているのだが、その同じ特徴を鯨の顔が具えているということを、この章は強調して説いている。それを、Prairie という語から、文字 i を抜き去る、つまり dash off することによって、Melville は表現しようとしたのではなからうか。したがって、Prairie と綴られているのは、Melville によるひとつの手法であって、正しい綴字に訂正する必要がないのではないか、ということになる。

Support となる引用文としては、つぎのようなものがある。

In some particulars, perhaps the most imposing physiognomical view to be had of the Sperm Whale, is that of the full front of his head. This aspect is sublime. (p. 447)

But in the great Sperm Whale, this high and mighty god-like dignity inherent in the brow is so immencely amplified, that gazing on it, in that full front view, you feel the Deity and the dread powers more forcibly than in beholding any other object *in living nature*. (p. 447)

Melville は、鯨のひたいには謎が刻み記されている、pleated with riddles (p. 448)、と述べている。鯨のひたいにきざまれた象形文字を解読する Champollion はいないのか、と述べて、Melville は、いわば、読者を挑発している。

Champollion deciphered the wrinkled granite hieroglyphics. But there is no Champollion to decipher the Egypt of every man's and every beings' face. *Physiognomy*, like every other human science, is but a passing fable. ... how may unlettered Ishmael hope to read the awful Chaldee of the Sperm Whale's brow? I but put that brow before you. *Read it if you can*. (p. 449)

鯨のひたいを読者諸氏の前に置くから、そこに表現されている象徴的意味を、頭部の特徴から、読めるなら読んでみよ、と Melville は云っている。

ところで、読者に謎解きを求めると同時に、Melville は、その解答も読者に示しているのである。

'*The Prairie*' の章の冒頭で、鯨の頭部を観想するにあたっては、Physiognomist (人相見) と Phrenologist (骨相見) の見方がある、と示唆している。

To scan the lines of his face, or feel the bumps on the head of this Leviathan, this is a thing which no Physiognomist or Phrenologist has as yet undertaken. (p. 445)

そして、人相学から見れば鯨には顔がない、というのが、'*The Prairie*' の章の要旨で

ある。それにたいして、‘*The Prairie*’のつぎの第80章‘*The Nut*’では、骨相学から見たばあいの鯨の姿が説きあかされている。それと同時に、‘*The Nut*’の章では、表面には出てこなかった文字*i*が、骨相学として見ると、鯨の体内にかくされて整然と存在している、と説明されている。つまり、*i*は、missing link になっていて、Melvilleが問いかけてきた問いは、次章の‘*The Nut*’の中に解答がかくされていることになる。

使用テキスト：◦ *Moby-Dick or The Whale* by Herman Melville ed, with an Introduction and Annotation by Charles Feidelson Jr.(Bobbs-Merrill Educational Publishing, Indianapolis, 1964)
◦ *Moby-Dick The Writings of Herman Melville Vol. 6* ed, by Harrison Hayford & G. Thomas Tanselle(Northwestern University and The Newberry Library, Evanston and Chicago, 1988)